

小早川欣吾先生記念メダルによせて (六訂稿)

—小田輝子氏「叔父小早川欣吾の思い出」とともに—

(令和 7 (2025) 年 8 月 9 日 (土) 現在)

(作成、補正経緯)

初稿: 平成 19 (2007) 年 2 月 25 日作成

HP 初出 改訂稿: 平成 19 (2007) 年 10 月 5 日作成

再訂稿: 平成 28 (2016) 年 8 月 6 日作成

三訂稿: 令和 3 (2021) 年 11 月 9 日 (火) 作成

四訂稿: 令和 4 (2022) 年 4 月 1 日 (金) 作成

五訂稿: 令和 4 (2022) 年 6 月 30 日 (木) 作成

六訂稿: 令和 7 (2025) 年 8 月 9 日 (土) 作成

・本稿は、先に某誌（平成 19 年 2 月 25 日刊）に掲載したものであるが、今般、註を脚注に変えるとともに、誤植等を補正した。今次再掲に当たりても、小田輝子様のご配慮を忝うした。誌して深甚の謝意を表する次第である。

(改訂稿: 平成 19 年 10 月 5 日誌)

・平成 28 (2016) 年 8 月 1 日に CD 版『小早川欣吾先生東洋法制史論集（増補版）併載: 小早川欣吾先生略年譜・著作目録（八訂稿）—ローマ法・法制史学者著作目録選（第十二輯）—』（平成 28 (2016) 年 8 月 1 日刊）を作成したが、同 CD 中に本稿もそのまま収録した。

(再訂稿: 平成 28 年 8 月 6 日追加)

・レイアウトを全面変更するとともに、一、二補正した。

(三訂稿: 令和 3 年 11 月 9 日 (火) 追加)

・一、二補正した。

(四訂稿: 令和 4 年 4 月 1 日 (金) 追加)

・一、二補正した。

(五訂稿: 令和 4 年 6 月 30 日 (木) 追加)

・一、二補正するとともに、今回から黒赤二色使用とした。

(六訂稿: 令和 7 年 8 月 9 日 (土) 追加)

(参考: 本 HP 所載小早川欣吾先生関連別稿)

- ・「小早川欣吾先生略年譜・著作目録」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kobayakawa001.pdf>〉

- ・「『小早川欣吾先生東洋法制史論集』収録論稿目次その他」

〈https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kobayakawa_toyohoseishi.pdf〉

(令和 3 年 11 月 9 日追加)

〔目 次〕

1 はじめに ……………	3
2 小田輝子氏の「叔父小早川欣吾の思い出」 ……………	5

1 はじめに

小早川欣吾先生(1900～1944)が逝去されてから早くも60余年を閲した。10年程前に、忝くも久保正幡先生(1911～2010)の御理解と御指導をいただき、当時國學院大學大学院で日本法制史を研究されていた竹内英治氏とともに、『小早川欣吾先生東洋法制史論集』(私家版、平成8(1996)年6月25日刊。以下「同書」。)を編集したことがあった。これは、戦前京大法学部において日本法制史の研究に従事される一方で東洋法制史を講じた小早川先生が御生前公表された中国法制史関係の論説、書評の類を集め、複写復刻したものである。当時は当今はやりのオンデマンド出版という言葉もまだ聞いたことのない時期で、その作成にはかなり戸惑ったが、国立国会図書館の『日本全国書誌』に掲載されたためか、欧米の二、三の図書館からも購入依頼があり、驚いた覚えがある。

久保先生は、かつて御近隣に小早川先生御令室様の姉婿に当たる長谷川峻明氏(1889～1984、東大卒の医師。)が居られ、折に触れて同氏から先生の思い出を聞いてみえたとのことで、同書作成に当たっては、久保先生から、御懇篤な御激励、御教示を頂戴出来た。同書巻頭を牧英正先生(1924～2018)の「小早川欣吾先生の東洋法制史論集上梓によせる序」で飾ることができたのも、ひとえに久保先生の御配慮と牧先生の御厚情に拠る。また、上山安敏先生(1925～2021)、中澤巷一先生(1930～)からも御示教をいただけた。ここに改めて四先生に深甚の謝意を表するものである。

同書編纂の過程で、去る平成18(2006)年9月初めに99歳で長逝された彦根市御在住の小早川先生御令弟の巖様(1907～2006)より御令姪の小田輝子様(1927～2022)を御紹介いただき、先生のことについて様々なことをお聞きできた。小田様は、平成4(1992)年には、彦根市文化功績賞を受賞(「音楽、文芸(随筆)の普及振興」の功)され、その後、同市の社会教育委員長も勤められた方で、現在新しい政策シンクタンク活動を大々的に展開されている有名な小田全宏氏は御令息とお聞きしている¹。

¹ ・平成31(2019)年2月の全国紙は、「彦根藩13代当主で幕末の大老、井伊直弼が自作の和歌を自ら編集した和歌集「柳廼四附(やなぎのしずく)」を、彦根市の元中学教諭、小田輝子さん(92)らが初めて全文を解読し、現代の活字に置き換えた翻刻(ほんこく)本として出版した。」(要旨)旨を報じている。

〈<https://www.asahi.com/articles/photo/AS20190213003126.html>〉

〈<https://mainichi.jp/articles/20190214/k00/00m/040/065000c>〉 (令和3年11月9日追加)

(追加)

・細江正人氏(滋賀県県会議員、1946～)「小田輝子先生、井伊直弼公の和歌集『柳廼四附』出版!」『ニューズレター』vol.23(平成30(2018)年11月18日刊発行)

〈<https://hosoemasato.jp/newsletter/000087>〉

(PDF版) 〈<https://hosoemasato.jp/media/newsletter/shiga/23.pdf>〉 (令和7年8月9日追加)

その時、小田様より長年御愛蔵されていた先生の遺品である記念メダル2個（①第3回東西両大学対抗競技優勝メダル（小早川欣吾君、1926年、京都帝国大学陸上競技部）、②山口高等学校運動会メダル（1924年））や山口高校御在校時の多数の御写真等を託された。これらは、久しくお預かりしたままで、気がかりであったところ、うち記念メダル2個については、松尾尊兌先生、西山伸先生の御高配で、去る平成18（2006）年2月15日、京都大学大学文書館にお納めいただいた²。これで、漸く最適の場所で永久に保管していただけることとなった訳で、小田様にもお喜びいただけ、寔に嬉しいことであった。その後、小田様は、百周年時計台記念館その他を御見学された由であるが、京大構内に入られたのは、実に小早川先生に案内していただいて以来とのことであったという。

同書編集に先立ち、『小早川欣吾先生略年譜・著作目録』（初稿、私家版、平成7（1995）年8月15日刊）を作成していたが、その後改訂する機会があり、小田様に先生の思い出をお書きいただくことをお願いしたところ、「叔父小早川欣吾の思い出」なる御玉稿をその四訂稿（平成9（1997）年10月20日刊）に掲載できた。ただ、この『略年譜・著作目録』は、限定発行の私家版のため、同稿も多くの方々のお眼に触れることがないので、今般記念メダル保存の件が落ち着いた機会を捉え、再録しておきたいと考え、小田様に再掲方を懇請したところ、御高諾を得た。小早川先生の御業績の再検討が関心事になりつつある現在、先生在りし日を想起させ、そのパーソナルヒストリー研究³の一つのよすがともなるのではないかと思い、ここに収載させていただく次第である。なお、小田様の原文は縦書きのため、漢数字はアラビア数字に改め、かつ、註を二、三付した。

・その後小田様（1927～2022）には令和4（2022）年7月4日に逝去されたと仄聞する。謹み御冥福をお祈りいたします。（令和7年8月9日追加）

² 『京都大学大学文書館だより』第10号（平成18年4月28日刊）8頁〔日誌〕参照。

³ 小早川先生の主な追悼・回想記としては、上記牧先生の御序文以前には、次のものがある。

・牧健二「小早川教授の逝去」『法学論叢』第50巻第4号（昭和19年4月1日刊）

・牧健二「小早川欣吾著『近世民事訴訟制度の研究』序並びに解題」同書（有斐閣、昭和32年9月30日刊）所収

・前田正治（書評）「小早川欣吾著『近世民事訴訟制度の研究』」『法と政治』第8巻第3・4号（昭和32年12月25日刊）

・牧健二「『瀧川事件及び法学部存続当時の真相』補筆」『有信会誌』第20号（昭和51年10月1日刊）

・牧健二「小早川欣吾著『日本担保法史序説』新版跋」同書（法政大学出版局、昭和54年10月23日刊）所収

・牧英正「小早川欣吾著『増補近世民事訴訟制度の研究』復刊にあたって」同書（名著普及会、昭和63年6月20日刊）所収

2 小田輝子氏の「叔父小早川欣吾の思い出」

叔父小早川欣吾の思い出⁴

叔父小早川欣吾は、私の実母のすぐ下の弟で、私の知っている叔父は、背が高く体格もよくスポーツマンでした。

叔父の両親⁵は、昭和 10（1935）年頃から彦根に住んでいました。私から言えば母方の祖父母にあたりますが、母と私はそこへ同居していたのです。昭和 17（1942）年頃、叔父は京都の北白川⁶に居住していたので、時々祖母は北白川へ出かけました。「京都へ来る時は、身なりをきちんとしてこいよ。」と、叔父は母親に言っていたらしいのです。祖母は「こんな事を言うのよ、欣吾は…。母親が息子の所へ行くのに何で正装していかんなんらの、あの子は妙なことをいうねえ。」と、母にこぼしていたことを覚えています。また、田鶴子さん（もと叔父の妻）⁷と結婚してから、二人揃って彦根へ帰る時、何度も私に「叔母さんと呼んだらだめよ。田鶴子姉さんと呼ぶようにしてくれ。」とも言っていました。

母親に要求した身なりのこと、私に言った叔母への呼方、それらは当時比較的ダンディであった叔父に心の中の見栄が言わせたのかもわかりません。しかし叔父は明るくよく高らかに笑っていたことも印象に残っています。

「立山へ登ってスキーをするのだ。雷鳥がとても可愛いぞ。」スキーの姿で雪渓の上に立ち、すぐ横の岩場に休む雷鳥と並んでいる写真を見せてくれたことがありました。

やり投げ、砲丸投げ、短距離、水泳と、たいていのスポーツをこなしたようですが、学生時代から特に陸上競技が得意だったそうです⁸。

「若い中にできるだけ体を鍛えておくことだ。」とか「考古学はおもしろいんだ。大昔のことが無限にわかるんだから…。」⁹とかよく耳にしました。また「若い時に勉強しておかないとだめだ。勉強に関して欲しいものがあつたらなんでも買ってやるから言うんだぞ。」と私に度々言ってくれました。その頃買ってもらった和裁全書上下巻は、今でも私の本棚に納まっています。叔父の家の本棚には、法律、考古学は勿論、文学全集等もぎっしりつまっていました¹⁰。叔父の留守中は、祖母と私は、留守をたのまれて何度か出かけましたが、その時、読書できるのが一つの楽しみでもありました。

叔父には、やさしくユーモアのある一面もありました。ある日、鞆の中から出したものをかかげながら、「これはサラミソーセージと一言うんだ。うまいぞ、食ったことあるか？」

⁴ 同稿は、初め『小早川欣吾先生略年譜・著作目録』（四訂稿、平成 9 年 10 月 20 日刊）に御寄稿いただき、その後六訂稿（平成 15 年 9 月 1 日）刊行時に御加筆いただいたものである。

⁵ 小早川平吉氏（1871～1946）、同りう氏（1875～1953）。

⁶ 昭和 18（1943）年 4 月現在では、御住所は「京都市北白川別当町 7-4」である。

⁷ 小早川田鶴子様（旧姓長島、1911～2000）。同氏は平成 12（2000）年 1 月 25 日永逝された。

⁸ 牧健二掲「小早川教授の逝去」、『山口高等学校史』（旧制高校叢書）（校史出版、昭和 43 年 4 月 1 日刊）各参照。

⁹ 例えば小早川欣吾「山口県下に於ける考古学調査の一片」『校友会雑誌』第 12 号（山口高等学校、大正 13 年 12 月刊）参照。

¹⁰ 主要な研究資料については、『小早川文庫目録』（京都大学法学部、昭和 53 年 3 月 31 日刊）参照。

私はその時生まれてはじめてサラミソーセージを口にしたのです。また、こんなこともありました。何の演題だったのか忘れましたが、叔父が助教授の時でした。どういう所から話を頂いたのかわかりませんが、彦根の女学校の講堂で、一般人対象に叔父の講演会が開かれました。両親の住む町で錦を飾らせてもらったのかもしれませんが。その時祖父は「欣吾の話を聞きに行く。」と言っていそいそと出かけて行き、羽織姿で一番前の座席に坐っていたそうです。上機嫌で帰って来た叔父は、「前列のまんなかにいるおやじが見えてね…」と話していました。

研究の為に旧満洲に一寸行かねばならないと言う二、三日前に、何故か私は叔父と一緒にいたのですが、京都駅で、「叔父さん、元気で早く帰って来て下さいよ。」と別れる前に、ふと、「何か買ってやろうか？」の叔父の言葉に、突然でもあり、答えられないでいる私に、「じゃ時間がないからな、お祖母さん（叔父の母親のこと）の好きなお茶でも買おう。」と上等のお茶を、「これお祖母さんにな」と言って渡してくれました。早くから母親と離れ住んだ叔父は、やはり母親の顔が目目に浮んだのかも知れません。それが、元気な叔父との最後の出逢いになってしまったのです。

昭和 19（1944）年 6 月満洲から帰った叔父は、喉に悪性の菌にとりつかれ、すぐ入院、手術、死とあっけなく 44 歳の生涯を閉じました。大津の学校¹¹に在学していた私は、叔父の死の知らせを受け、信じられない気持ちで、京都へかけつけました。

叔父はすでに棺の中に横たわり、端正な顔はそのままで眠っているようでしたが、手術をうけたと言う喉には、いく重にも包帯がまきつけられていました。

スポーツもさることながら、心底自分のやりたい学問を追究する為に情熱を傾けた叔父でしたが、これからと言う時に中断を余儀なくされたことは、どんなに無念だったことでしょう¹²。

叔父の死から半世紀余、すべて風化した筈なのに、ここに、久保正幡先生、牧英正先生、吉原丈司様、竹内英治様はじめ、関係の方々によって、叔父の著書¹³や目録¹⁴を世に出して下さいましたこと、どんなにか叔父も喜んでいることでしょう。そして「ありがとう！感謝していますよ。」と笑いながら手を振っている叔父の姿が見えるような気がします。

平成 9（1997）年 9 月 29 日

於彦根

小 田 輝 子

¹¹ 小田様は昭和 20（1945）年滋賀師範学校（女子部）御卒業との由。（令和 7（2025）年 8 月 9 日追加）

¹² 牧健二前掲「小早川欣吾教授の逝去」

¹³ 『小早川欣吾先生東洋法制史論集』（私家版、平成 8 年 6 月 25 日刊）を指す。

¹⁴ 『小早川欣吾先生略年譜・著作目録』（四訂稿、平成 9 年 10 月 20 日刊）等を指す。なお、当該目録の現時点での最新版は、『栗生武夫先生・小早川欣吾先生・戴炎輝博士・小林宏先生・山崎丹照先生略年譜・著作目録（二訂版） 一内藤吉之助教授・金田平一郎博士著作目録（初稿） 一ローマ法・法制史学者著作目録選（第八輯）一』（平成 19（2007）年 1 月 1 日刊。上山安敏先生序文、附録として淵定教授（初稿）分あり。CD 版あり。）中の七訂稿である。（⇒その後逐次改訂し、今現在（令和 7（2025）年 8 月 9 日）は 16 訂稿に至っている。）